

瀬田貞二の宮沢賢治観

—幼年童話としての特質をめぐって—

A View on Kenji Miyazawa's Literature by Teiji Seta

— On the Features of Children's Story —

山田 吉郎

Yoshiro YAMADA

序

日本の児童文学を考える際に宮沢賢治は最重要の存在と考えられるが、また一方で宮沢賢治童話は子どもの読者にふさわしいものなのか、むしろテーマとしては難解な要素をはらみ、必ずしも読者の子どもたちにとって受容しやすいものではないのではないかという見解も見られる。このような宮沢賢治童話を、子どもの読者、それも幼年期の読者がどのように受け容れるのかを考える際に、瀬田貞二の宮沢賢治評が興味深い示唆を与えてくれると思われる。

瀬田貞二は太平洋戦争後の児童文学の領域を牽引した文学者の一人である。とくに『幼い子の文学』(昭和55年1月25日、中公新書、中央公論社)をはじめとして幼い子どもたちに受容される童話や絵本のあり方を探究した論考が多く、また自らも創作を手がけた児童文学者としてその業績は重い存在感を放っている。現在は『児童文学論〈上下巻〉—瀬田貞二子どもの本評論集—』(平成21年5月25日、福音館書店刊)にまとめられているが、その下巻に「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」と題する一篇が収められている。『子どもと文学』は昭和35年4月に中央公論社から刊行され、その後、昭和42年5月に福音館書店から再刊行されたものである。この宮沢賢治童話を論じた瀬田の批評文を手がかりに、子どもにとっての宮沢賢治童話の意味づけをあらためて考察するのが本稿のねらいである。

1 「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」について

さて、瀬田貞二「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」は、以下のような章から成り立っている。なお、テキストは前述の『児童文学論〈下巻〉』による。

「なめとこ山の熊」を読む

児童文学の立場から

その文学上の経歴

初期の作品について

中期の作品

後期の作品

その文学をそだてたもの

その文学の特質

以上のような八章から構成されている。宮沢賢治の人と文学を概観する章と、児童文学の視点から宮沢賢治童話の特質を分析した章から成り立っている。この八章のうち、とくに瀬田の宮沢賢治観があらわれているところを中心に見てゆくが、まずはこの八章の概略を記す。

第一章の「『なめとこ山の熊』を読む」では、冒頭で次のように述べられている。

はじめ、私たちにとって、宮沢賢治は、小川未明や浜田広介、千葉県三や坪田譲治と、どこかしらちがうところがあるという予感がありました。それにまた、賢治の作品は、子どもにとっても、いろいろな問題があるだろうという予想も働いていました。そこで私たちは、それがなんだろうということで、これまでのように彼の作品のいくつかを丹念に読んでみました。

(313頁)

瀬田が加わる児童文学の読書会でのことが語られているが、宮沢賢治を読むにあたって、皆の共通認識として宮沢賢治童話は、小川未明や浜田広介など他の児童文学作家の作品とは「どこかしらちがうところがある」という予感があつたと記されている。そして、具体的に読書会での反応、感想が列挙されている。その反応や感想については省筆するが、二、三例だけあげると、賢治の『なめとこ山の熊』について、「童話といってもこれは子どもに理解させることも、理解されることも頭においてない。」「いや、童話精神にみちみちた本格的な童話であることは認めたい。」「詩的とか童話的とかいう議論にこだわるまい。この一篇が一気に感動をこめて作られた点が、よくわかればいい。」(315頁)というように、相反する多様な見解が錯綜するものであることが分かる。賢治童話のすぐれた点は認めつつも、子どもの理解、受容という視点において意見が分かれていると言えよう。

第二章にあたる「児童文学の立場から」は、二頁ほどの短い章ではあるが、ここで瀬田は宮沢賢治童話について自らの見解を明確に述べている。詳しくは後述するが、とく

に坪田譲治の宮沢賢治観と対比させつつ論じている点に特色がある。第三章の「その文学上の経歴」では賢治の経歴が概観されている。第四章「初期の作品について」、第五章「中期の作品」、第六章「後期の作品」は、一見賢治作品の概観を初期、中期、後期に分けて行っただけのようにも見えるが、しかしながら随所に瀬田独自の見方が認められ、後の章で詳しく触れることにしたい。

第七章の「その文学をそだてたもの」では、宮沢賢治童話成立に影響を与えたものとして、郷土の自然、民俗、宗教、教養をあげている。この中で注目したいのは、第二の要素としてあげている民俗であるが、とくに昔話の影響について論じた部分は重要であり、後述する。そして第八章「その文学の特質」では、子どもにおける宮沢賢治童話受容の観点から、五点に絞ってその特質を明確に提示している。

以上、瀬田貞二「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」の構成について概観した。次章では、今まで指摘した注目点に即して、瀬田の宮沢賢治観を捉え、その特質と意義を考察してゆくことにする。

2 坪田譲治の宮沢賢治観に対する瀬田の批判

「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」の第二章「児童文学の立場から」において、瀬田貞二は坪田譲治の宮沢賢治観を引きつつ、自らの見解を述べている。その部分を次に引く。

賢治の人と文学についてたくさんの研究があり、いろいろと論評されてはいますけれども、それらはすべて大人がこれを鑑賞し、大人がこれを論評して、その立場からよしとするだけのことで、子どもの立場に近よせて、子どものためにどうかという見方がとられませんでした。そこで、坪田譲治氏が、「……それからもう一つの問題は、この宮沢作品の読者は誰であるかということでもあります」と切り出しているのは、当然のことといわなければなりません。しかし坪田氏は、その疑問につづけて、「（それは）オトナなのか。子供なのか。子供は幾つくらいの子供か。私はこれは小学生には充分理解されないように思うのであります。中学生以上でなければならぬと思います。そんな点からも、これを童話というのは、どうであろうか。何と言ってもかまわない、傑作なのだからと思はするものの、少しばかり気になる次第であります」と述べています。(320—321頁)

坪田譲治は宮沢賢治童話を傑作とは認めるものの、小学生には十分に理解されず、中学生以上の読者を対象としているとし、「これを童話というのは、どうであろうか」と疑問を呈している。これについて瀬田貞二は、坪田が宮沢賢治童話を「結局は大人の味わうべき文学、少なくとも中学生以上の理解する文学、と考えていることが明らか」(321頁)であると述べているのだが、しかし「私たち(注一瀬田と同じ読書会の人たち)は、(中略)賢治の作品が、かなり小さい子どもにもよくわかる文学であり、また事実、作

者は多くの作品を子どものために書いたもの」(321頁)と考えていると捉える。

そのように宮沢賢治童話が子どもに受け容れられる文学だということを、以下瀬田はこの評論の中で論じてゆくのだが、この第二章の末尾でコメントしている次のような考え方は、瀬田の考え方を理解する上で参考になると思われる。

宮沢賢治その人の生活上の理念や、作品に含まれる問題(訴えようとする主題)には、たしかに、子どもには理解できない哲学上の考えがありますけれども、そういう点では、子どもの読む諸国の神話でも、『ふしぎの国のアリス』でも、同じことがいえましょう。私たちは、宮沢賢治のかなりたくさんの作品が、正しい意味で、子どものための文学であり、それが大人さえ楽しませることができたのだと信じます。(321頁)

ここで述べられているのは、一つの童話作品や昔話が、子どもたちが受容するにあたってどのような接点をもつかという問題である。例示すれば、昔話の『かさじぞう』でもその昔話の奥行きには子どもではまだ理解が及ばないテーマが横たわっていることが想定されるが、幼い子どもたちは真夜中に地蔵がそりを曳いてくる場面に目を輝かせるなど幼い子どもたちなりの受容をなしてゆくのであり、そのように物語が幼い子どもたちと受容の接点をもつ時、その物語は子どもたちに受け容れられていると言えるであろう。そして、その物語を読み感動を伴う読書体験をした子どもたちは、やがて十歳の壁を越えて成長してゆく時、その物語のさらに奥行きを知ってゆくと言えるであろう。

なお、瀬田は後の章で、宮沢賢治童話のどのような要素が幼い子どもたちの受容と接点をもつかを具体的に指摘しており、後述したい。

3 賢治童話への瀬田の視点

「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」の第三章より第六章までは、宮沢賢治の文学上の経歴や、初期・中期・後期の作品を概観した部分であるが、私見によれば単なる概観にはとどまらず、随所に瀬田独自の見解がうかがわれ、本章ではその点を分析したい。

第一におさえおきたいのは、賢治の文学活動の概観を試みた瀬田が次のように述べている点である。

短い三十七歳の生涯を見てきますと、詩や劇は別として(ここでは扱いません)、その作品のほとんど全部が彼のいう「童話形式」のものばかりで、二十二歳の時に筆をそめてから十余年間を、彼が童話一本やりでつらぬいたことがわかります。そして、大正十(一九二一)年に、堰を切ったようにたくさんの作品を書いた時期をひとつの山としますと、それ以前を初期の習作期、大正十五年に教師をやめて農業の実践活動にはいったのを境目として、以後を後期の完成期と見ることが出来ます。もちろん、大正十年から後期の境までが、中期にあたります。(323頁)

ここで瀬田は、あらためて宮沢賢治が「童話形式」にこ

だわっていたことを再認識している。瀬田の言葉を借りれば、「童話一本やりでつらぬいた」のである。宮沢賢治童話のモチーフや内容が幼い子どもには理解しにくいとの批判はたしかにあるものの、瀬田はここで賢治が明らかに読者を子どもに設定して自らの創作活動を、生涯にわたって展開していたと捉えているのである。この辺の事情をどう解釈するかがポイントになるであろう。

宮沢賢治作品を概観する瀬田の叙述において第二におさえておきたいのは、「初期の作品について」の章で賢治が読者を子どもに焦点化しつよく意識していることに言及した部分である。賢治が自らの初期作品の欠陥を認めていたらしいことに瀬田は言及し、とくに原稿の欄外の書き込みに触れた箇所注目している。その部分を引く。

「貝の火」には「単純化せよ、無邪気さをとれ、因果律を露骨ならしむるな」と書き、「双子の星」には「一層の無邪気さとユーモアとを有せざれば全然不適、尋四年以下の分」と書いて、小学四年以下の子どもたちのために、単純で自然でユーモアのある作品を与えようとした態度がうかがわれます。(324—325頁)

ここで瀬田は、宮沢賢治が童話執筆にあたって、無邪気さとユーモアを重視し、加えて小学四年以下の子どもたちの理解を前提としていた点を指摘している。この中で、とくに瀬田が小学四年以下というところに着眼しているのは、瀬田自身の児童文学への向き合い方と繋がってくるであろう。瀬田の没後に刊行された『幼い子の文学』に代表されるように、瀬田の児童文学活動の力点は幼年期を対象とするところに置かれていると思われ、その点で賢治の言う「尋四年以下」に着目しているのは重要である。さらに、この「尋四年以下」については、賢治の名作『雪渡り』の中の一節が想起される。作中の主人公四郎が、兄さん達にも狐の幻燈会の入場券を分けてくれるように求めたところ、子狐の紺三郎は「兄さんたちは十一歳以下ですか」と問い返し、その年齢を越えていた兄たちの入場を断わっている。宮沢賢治にとって自らの童話制作において十歳前後のところに大きな境界線があったことがうかがわれるが、瀬田貞二はまた賢治の『雪渡り』が絵本化された際にもその解説を担当しており¹⁾、賢治の「尋四年以下」という発言を重視していたと考えられる。

さらに、この「尋四年以下」という賢治の発言は、現代の教育分野で用いられる「十歳の壁」とも符合する。子どもの成長において、幼年期の感性や思考から大人への移行がなされはじめる時期が十歳前後であり、子どもの感性や思考は大きく変化してくる。その十歳の壁への認識も当然瀬田の中にあつたと考えられるのである。宮沢賢治が当時において十歳前後を子どもの成長の一つの区切りと見なしている点にも注目されるが、併せて瀬田貞二が「尋四年以下」という宮沢賢治の認識に関心を示し、そしておそらくはそれを一つの根拠として賢治の児童文学への姿勢を評価しているのだと推測される。

宮沢賢治の人と作品を概観する瀬田の文章の中で第三に注目したいのは、前述の第二の着眼点とも重なるが、賢治

の子どもへの「顧慮」に触れた部分である。第五章の「中期の作品」からその一節を引く。

同じ広告文（注一童話集『注文の多い料理店』の賢治自身が書いた広告文）のなかの「この童話集の列は実に作者の心象スケッチの一部である。それは少年少女期の終り頃から、アドレセンス中葉に対する一つの文学としての形式をとつてゐる」という箇所を引用して、私は以前に、読者をあまり顧慮にいれずに、自分の内部の衝動から純粋に書いたために、「童話という一つの文学の形式」をとるようになったことを意味するのだと思いました。そしてそのことを、「純粋な考えかたをして純粋な書きかたをしたために、童話になり、子どもに読まれるようになった、とそう思います」と賢治の選集（岩波少年文庫『ゼロ弾きのゴージュ』）に記しました。その考えの根本は改める必要がないと思いますが、今あらためて、子どもたちをつねに顧慮して書いたことをつけ加え、指摘しておきたいと思います。自らのために書いたことと子どものために書いたこととは、一般に矛盾する態度のようでありながら、賢治には別々にできない一つのものであったのではないのでしょうか。(326—327頁)

ここで瀬田貞二は、宮沢賢治が「子どもたちをつねに顧慮して書いた」点を指摘し、併せてそれがあくまでも「賢治の内部の衝動から純粋に書いた」ものであり、おのずと「童話という一つの文学の形式」をとるようになったと述べている。先にも記したように、宮沢賢治の散文創作は、ほぼ童話の領域で一貫している。詩作品の場合は趣を異にするが、この童話創作で一貫している点をどのように捉えるかは難しい問題である。周知のように、賢治の童話創作が大正十年以降国柱会にはいり布教のための童話創作をすすめられたことが大きな機縁になっていることは考慮されるが、しかしそれ以前から賢治の童話創作への志向は認められる。子どもへ語るという視点や姿勢が賢治の散文創作において形成、確立された要因を明らかにするのは容易ではないが、少なくともこの童話創作への志向が宮沢賢治の生涯にわたって根をおろしていたことを瀬田は見抜いたがゆえに、前述の発言へとつながったのであろう。

第四に注目したいのは、瀬田が宮沢賢治の童話作品を概観した最後に、学年別の読者に適した作品のリストをあげている点である。賢治が『雪渡り』の中で述べた「十一歳以下」という年齢をあてはめると、おおよそ「1・2年」と「3・4年」の欄に並べられた作品を、幼い子ども向けの作品と見なすことができようか。「1・2年」の学年のリストに掲載された作品としては、初期の『蟻ときのこ』『黒ぶどう』『貝の火』、中期の『カイロ団長』『茨海小学校』『クンねずみ』『ツェねずみ』『蛙のゴム靴』『とっこべとら子』『雪渡り』、後期の『ざしき童子のはなし』『オツベルと象』などがある。ついで「3・4年」の学年のリストに掲載された作品としては、初期の『二人の役人』『双子の星』、中期の『どんぐりと山猫』『狼森と笹森、盗森』『注文の多い料理店』『鹿踊りのはじまり』『シグナルとシグナ

レス』、後期の『北守將軍と三人兄弟の医者』『セロ弾きのゴーシュ』などがある。これらの作品を概観する中で、その作品が広く読者に浸透しているものをあげれば、『雪渡り』『ざしき童子のはなし』『オツベルと象』『どんぐりと山猫』『注文の多い料理店』『セロ弾きのゴーシュ』などがあるであろう。これらには絵本化されているものもあり、子どもたちに親しまれている。とくに『雪渡り』は幼年童話として知られ、先述のように瀬田貞二自らが解説を執筆しており、関心の深い作品であったと想像される。

ここで『雪渡り』について述べれば、この作品は幼い主人公の四郎とかん子の兄妹が狐の幻燈会に行き帰ってくるという物語であり、いわゆる幼年童話の基本原則ともいえる「行って帰る」構想が設定されている。さらにオノマトペの効果、歌謡的要素、子狐たちとの交歓、食べ物のモチーフ、同質のエピソードの反復、東北地方のわらべうたの導入など、幼年童話に必要な多くの要素が備えられ、幼い子どもの読者が親しめる幼年童話に仕上がっている。なお、『雪渡り』については筆者の別稿²⁾を参照していただければ幸いである。

以上、瀬田貞二が宮沢賢治童話の概観を試みる中でとくに注目される論述を指摘し、その意義について考察を加えた。

なお、瀬田貞二「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」の第七章「その文学をそだてたもの」の章は、宮沢賢治の文学創作の背景をなした諸要素に言及している。郷土の自然、郷土の民俗、宗教、教養の四点をとくに立項して論じているが、この部分はやや概念的になっているのは否めない。が、その中で第二点の「郷土の民俗」について触れた部分は瀬田自身の関心と深く触れ合うところがあり、短文ではありながら注目される。

そこで瀬田は、「彼（注一宮沢賢治）は小さい時にむかしこ（昔話）を好んで聞いたといわれますが、大きくなってからも昔話を愛して、いくつかの物語のテーマにしたばかりでなく、子ども会でも語って聞かせました。」(334頁)と述べ、賢治童話の基盤に東北の民俗が深く根をおろしている点に着目する。とくに「花巻地方のある稗貫郡ひえぬきは、民話で名高い下閉伊郡しもへいや紫波郡むらさきにかこまれています。大正の半ばから昔話採集の先達となった遠野の佐々木喜善きぜん氏の諸著作や、柳田國男氏の『遠野物語』なども、雑誌に発表された折に若い賢治が眼にし耳にしたことがあったのではないのでしょうか。」(334頁)と記しているのは、先述の絵本『雪渡り』の解説を瀬田が書いていることと結びつけて、瀬田の宮沢賢治理解の重要部分を形成していると考えられる。

4 子どもと読者と賢治童話

瀬田貞二「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」の結論にあたるものとして、最終章「その文学の特質」が置かれている。その冒頭では、

宮沢賢治の作品は、どういう点が子どもたちにふさわしいのでしょうか。(337頁)

と正面から問いを発し、それに対する瀬田自身の見解を五点にまとめて提示している。その五点とは、要約すると以下のようなものである。

- ①しっかりした作品の構成
- ②単純で、くっきりと、目に見えるような描写
- ③張りのあるリズム
- ④随所にいろいろな形であらわれるユーモア
- ⑤ゆたかな空想力

以上の五点について瀬田は順次解説しつつ論じている。これらは概して童話作品の構成や表現について論じたものであり、賢治童話の主題、モチーフ、思想等に触れたものではない点が注意される。これについては、瀬田自身先に第二章「児童文学の立場から」の中で、賢治作品の中には「たしかに、子どもには理解できない哲学上の考えがありますけれども、そういう点では、子どもの読む諸国の神話でも、『ふしぎの国のアリス』でも、同じことがいえましよう。」と述べている点が参考になろう。すなわち、作品のはらむ深い「哲学上の考え」は、幼い子どもたちにはまだ理解が及ばないけれども、子どもたちの発達段階に従ってその作品が受容される段階があり、その物語がはらむ諸要素で子どもたちの心にひびき、届く部分が確実にあるということであろう。こうした前提に立ち、瀬田は以下、前述の五点についてさらに詳しく論じてゆくのである。

次にその五点について、順次考察する。

まず第一の作品構成のしっかりしている点について。瀬田は次のように述べる。

小さな読者が心から満足できるように物語を組み立てます。昔話の骨組が生きています。

どの物語でも、いきなり冒頭から事件を予想させるものをずばりと示します。「どんぐりと山猫」では、一郎のところへふしぎな葉書がまいこんできますし、「オツベルと象」では、オツベルの工場へ白い象がやってきます。つぎに事件は次第に高まり、クライマックスでは奇抜なことが起こります。(中略)次第に高める手法は「注文の多い料理店」で典型的に見ることができます。そして結末はどれも期待のみたされるものでした。(337頁)

ここで注目したいのは、瀬田が宮沢賢治童話の構成に「昔話の骨組が生きています」と記している点である。宮沢賢治が東北の民俗に深い関心を抱いていたであろうことは先に述べたが、昔話には『ももたろう』『一寸法師』『かさじぞう』『おむすびころりん』などいずれも物語構成の起承転結が鮮明に設定されたものが多く、しかもどこかに超自然的なできごとを導入して人々の関心を惹きつけるものが多い。宮沢賢治童話の場合にも、こうした要素は色濃く見られ、その意味で昔話的要素を基底に据えているとは言えるであろう。掲出の瀬田の言及自体は簡潔なので、詳しく分析することはできないが、先に触れたような『雪渡り』の解説執筆などを考慮に入れると、瀬田は宮沢賢治童話の中の昔話的要素をとりわけ重要視していると推察され、瀬田の昔話観と結びつけた宮沢賢治観の考察は今後の

重要な研究テーマになると考えられる。

次に第二点の「単純で、くっきりと、目に見えるような描写」について。これは考えてみればすぐれた作品には備えられているものであり、瀬田も短く簡潔に指摘している。作品例として『やまなし』をあげているのが特徴で、

「やまなし」という短篇は、川底のカニの物語で、とりたてていう筋のない情景描写が中心ですから、へたにやられては単調になりがちなものですが、やさしい室内楽か美しい幻燈画のような効果を出しています。(337頁)

と評しているのが注目される。この作品は冒頭で「小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈です。」と語られているように、その水底のカニの親子の様子を鮮やかに写し出しているところに特色がある。独特の会話とオノマトペの効果とともに、水底の光と影のあやなす世界が色彩感豊かに描出されている。『銀河鉄道の夜』でもそうであるが、宮沢賢治の光と影の交錯や豊かな色彩感を伴った情景描写には独自性がある。瀬田の前掲のコメントは、賢治童話をこうした描写論からあらためて分析してゆく手がかりを与えてくれるものである。

第三点の「張りのあるリズム」については、瀬田は重要な指摘をしている。「賢治は言葉のひびきに敏感な詩人でした。」(337頁)と冒頭に述べ、方言、擬声音、擬態音をはじめ文章全体に「張りのあるリズム」を響かせているとする。そして、特に賢治の使うリズムに言及し、次のように論じている。

彼の使うリズムは、七五調のような感情へ訴えるものではなくて、四四調のようなテンポの均一な、踊りのようなリズムです。「北上將軍ソンバーユーは」とか「オツベルときたら大したもんだ」とか、そういうリズムをとりいれて、はずむように話を進めます。そのさい、広介のように語法を犠牲にしたり、文脈に過剰な詠嘆調をつけ加えたりはしませんでした。リズムは、直接の形をとらない時でも、文章の内側の氣息となって、音楽のように流れました。(338頁)

ここでは、七五調と四四調の違いに言及している点に目を向けたい。七五調は短歌や文語詩などに広く用いられ、たとえば島崎藤村の「初恋」に代表されるような流麗な調べと余情を形成するところに特徴があると一般に言えよう。それに対して賢治の用いる四四調では、情感の豊かさを求めるよりも「はずむように話を進める」と瀬田は述べている。より叙事的なリズムと言ってよいであろうか。坂野信彦著『七五調の謎をとく—日本語リズム原論』(1996年10月1日、大修館書店)によれば、日本語は、二音、四音、さらに八音で単位としてのまとまりをもち、短歌・俳句では八音の枠組の中で七音と五音にそれぞれ休止符が伴うことによって余情が生じているということであるが、四四調の場合は休止符ははりにくく、それだけ叙事的な進行がなされてゆくということができようか。こうした日本語のリズムについて、それを宮沢賢治童話にあてはめて論じた点に瀬田の視点の清新さを認めることができる。

次に賢治童話の特色として瀬田が第四に指摘したユーモアについて。瀬田は「ユーモアの源はなかなかむずかしいもので、深刻癖と感情癖の強い日本人には不向きな要素ですが、おそらく、描く対象との間に同情のある余裕を持つことがそのカギではないでしょうか。そしてユーモアは、子どもの文学にたいせつなものです。」と記し、「賢治にはユーモアが随所にいろいろな形で現われています。」(338頁)と述べている。具体的には『セロ弾きのゴーシュ』の子ねずみがセロの底におさまった場面を指摘している。このほか例をあげれば『注文の多い料理店』の紳士たちが扉に書かれた指示のままにいろいろな動作をする様子や、『どんぐりと山猫』での一郎とキノコのやりとりなどにそうしたユーモアを感じとることができるであろう。なお、瀬田はつづけて、「賢治は、真剣なものばかりでなく、おさえきれない怒りの場合にも奇妙なユーモアをこめることができました。」と記し、「作品のうえでは、笑わされながらギョッとさせられる複雑な働きをもたらします。子どもの場合には、賢治のユーモアが、子どもを子どもとして守りぬく賢い解毒剤の作用も果たしました。」(339頁)と述べている。この後段の主張はたいへんに難解な要素もはらみ、また重要な論点を提示していると思われるが、慎重な解釈を要し、この小稿では視点の指摘のみにとどめておきたい。

最後に第五点の「ゆたかな空想力」についてだが、瀬田は「空想の翼にのって、自由自在に願望の世界にはいることのできる物語ほど、子どもに楽しいものはありません。」としつつも、「残念なことに、ファンタジーほど日本の児童文学に欠けているものもありませんでした。」(339頁)と述べている。こうした日本の児童文学の状況の中で、宮沢賢治童話については次のように捉えている。

賢治のファンタジーは、多くの子どものための名作がそうであるように、空想世界は現実のなかにひそんでいる真実をとり出して、しっかりと裏打ちをされました。突飛な感覚の切り売りや、とりとめのない幻想のおしつけではありませんでした。(339頁)

瀬田によれば、宮沢賢治童話に描かれる空想世界は、基本的に現実認識に裏打ちされているものであり、決して現実離れした空想ではないという。たしかに、『銀河鉄道の夜』にしても『注文の多い料理店』『どんぐりと山猫』『雪渡り』のどれを見ても、子ども社会の様子や都会と自然の対比、自尊心の認識、他者との信頼のあり方など、ゆたかな空想世界の中に確かな現実認識が横たわっている。また、物語によって幼い子どもの内部にうながされる想像力がいかに重要なものであるかは言を俟たないところであろう。そうした子どもの想像力をのびやかに刺激しつつ、そこに現実感に裏打ちされた空想世界を現出させた宮沢賢治童話の特質を、瀬田貞二は高く評価している。

以上、幼年向け児童文学研究の第一人者ともいえる瀬田貞二が、宮沢賢治童話のどのような点を評価していたのかについて考察を試みた。

結

児童文学研究、とくに幼年向け児童文学の研究に大きな功績をのこした瀬田貞二が、宮沢賢治童話をいかに捉えていたのかを考察した。具体的には、福音館書店刊の瀬田貞二『児童文学論〈下巻〉—瀬田貞二子どもの本評論集』に収録された「宮沢賢治—『子どもと文学』より—」をテキストとし、そこに論じられた瀬田の宮沢賢治観および賢治童話の捉え方を分析した。

瀬田は、今まで多くの宮沢賢治研究が積み重ねられながら、「子どもの立場に近よせて、子どものためにどうかという見方がとられませんでした。」と記し、その観点から論を展開している。その際坪田譲治の見解に対立する形で、「結論をさきに述べますと、賢治の作品が、かなり小さい子どもにもよくわかる文学であり、また事実、作者は多くの作品を子どものために書いたものと思いました。」と述べ、その観点から論を展開している。その具体的な要点は本論で分析した通りであるが、とくに賢治が幼年文学の範疇にはいる「尋四年以下」を読者対象とする認識をもっている点を瀬田は指摘し、その作品の特質として、確かな作品構成、鮮明な描写、独自の作品のリズム、ユーモア、ゆたかな空想力をあげて論じている点が注目される。

さらに賢治童話の生活上の理念や主題に触れ、この点に関しては子どもの読む諸国の神話や『ふしぎの国のアリス』でも同様のことが言えると論じている点も留意される。

本稿では、宮沢賢治童話の具体的な考察には踏み入ることができなかったが、今後の課題として、瀬田貞二の宮沢賢治童話観をふまえた上で、賢治童話の特質をより詳細に分析してゆきたいと考えている。

注

- 1) 絵本『雪わたり』（宮沢賢治作、堀内誠一画、昭和44年12月10日、福音館書店）参照。
- 2) 拙稿「宮沢賢治『雪渡り』と幼年童話」（『鶴見大学紀要』第49号、第3部、平成24年3月16日）参照。